三題噺『・扇風機　・冬　・ボール』

幼い頃、雪女と出会った。
雪のボール作りが上手で、雪合戦が得意な子。
雪が降る中、幼い私達はずっと二人で遊んでた。
そしてあの子は、「私が外で遊べるのは冬の間だけ。夏は溶けちゃうの」と教えてくれた。
幼い頃の私にとってそれは堪らなく悲しい話で、「毎年冬になったら絶対遊ぼう」と、幼い私達はその約束を破ることが無かった。

数年後の夏。
あれから私は大人になり、「冬になったら遊ぶ」という幼い頃の約束は、もう無いに等しい状態となってしまっていた。
私は夏の息苦しい暑さから逃げるように、自宅のドアを開けた。

「お〜か〜え〜り〜」

扇風機の目の前に座り込み、雪女がこちらに手を振った。
雪女の友人は、今では私と共にシェアハウスをして暮らしている。
きっかけは、私が一人暮らしを視野に入れ始めた頃の冬に、彼女があっけらかんとして言い放った言葉だ。

「夏になったら溶ける。じゃなくて、夏に外に出たら溶ける。だよ」

「だからシェアハウスはできる」と、彼女はニカリと笑った。